

# 米芾書史所載唐革新派書考

中 田 勇 次 郎

宋の米芾のあらわした書史および宝章待訪録について、すでに本論集の三号にわたって注釈ならびに考証をこころみてきた。今回はとくに唐代の革新派の書人たちをとらえて、米芾がどのような作品をどのように鑑賞していたかを考えてみようとおもう。それについて、張旭、顔真卿、懷素、高閑、聳光、楊凝式等の革新派の書人とその作品について、米芾の閲玩、鑑識、収蔵しているものを上記の二著のうちから取りあげて、書史が任意に排列している順序を改めて書人別に立てなおして考証することとする。

唐の革新派の書人たちは、玄宗の開元、天宝のころからその新しい書の傾向をあらわに示しはじめる。張旭がまずそのさがけをなす。張旭は蘇州の人。くわしい生没はわからないが、およそ開元、天宝の盛唐の時代に生存した。のちに唐の蘇渙の懷素上人草書歌に、「張顛没来二十一年」の句があり、この歌は大歴十二年（七七七）ごろまでに作られているであろうから、逆算してほぼ天宝の末年のころまでは生存していたと推定される。また、杜甫の殿中楊監見示張旭草書図詩に「斯人已云亡、草聖秘難得」とあり、この杜詩は大歴二年（七六六）の作とされているから、かれがこの年より以前に没していたことはほぼ誤りのないところである。その草書は李白、杜甫をはじめとして、李頎、高適（一七六五）、皎然など盛唐時代の詩人に歌われているから、その活躍期がこの時代にあることも動かぬところである。その人物は個儻閑達、卓尔不羣、ともに交際するところは、すべて当時の名士であったというから、かなり社会的に声名の高かった人物である。かれには郎官石柱記という魏晉風の清勁な楷書の石刻があるが、実際、名声のあったのは草書をよくしたことであり、杜甫の飲中八仙歌の中にその一人として、「張旭三杯草聖伝」と称えられているのももちろん草書である。その草書への志向がどのようにして起ったかということについては、かれがあるとき、屋外で、擔夫が路を争うのを見、また、鼓吹の音楽を聞いて筆法の意を体得し、のちまた、公孫娘が西河剣器（巾舞の一種）を舞うのを見てその精

神を得て、これより筆迹が大いに進んだと伝える。これは何か眼前にある物象のうちから、ある発想を求めて、その発想から書を作ってゆこうとする方法である。一面から言えば、当時なお初唐以来の王羲之の書の流行がやまず、それがさらに因襲化して、書道の伝授秘訣の形式で、書法に拘泥した学書の方法が行われていたのに対抗するものであったと考えられる。また、従前の形式主義に陥った書に対して、旧い技法をすてて、個人的な意趣による新しい書法の作をつくろうとする風潮も徐々に動きつつあった。このことは、これよりさき則天武后のころに出た李嗣真の書後品の中に、その当時の書を学ぶ人が師心の独往におもむくものがあるのを歎いていることによっても推察することができる。開元、天宝と言えば唐の文化の最も華美な時代であり、当時、酒を飲むことの興趣に人心が集中していたかと思われる。酒中仙とよばれた李白や、杜甫の飲中八仙歌によまれた八人の酒豪たち、その中に賀知章や張旭もふくまれる。書画において飲酒を借りて作品をつくるのは、このような酔酒の興趣から来ているところもあると思われる。張旭の書は、酒に酔うと三五声絶叫して白壁に向って縦横に狂草を揮毫した。ときに観客が拍手喝采してこれを喜んだという。甚しいときは頭髮に墨をひたして書いたとも伝える。よってかれを張顛と呼んだ。これは相当好奇的な常格を逸した方法であり、その異常さが社会のよび物になっていたようでもある。張旭の書の心を、このような遊戯的な興味本位のものからさらに有意義にとらえたのは韓愈の送高閑上人序である。これには張旭が喜怒、窘窮、憂悲、愉快、怨恨、思慕、酣醉、無聊、不平の心に動くあれば、かならず草書においてこれを発する。物を観、山水、崖谷、鳥獸、虫魚、草木の花実、日月、列星、風雨、水火、雷霆、霹靂、歌舞、戦闘、天地事物の変、喜ぶべく愕くべきを見て、一たび書に寓する。ゆえに旭の書は、変動すること鬼神の端倪すべからざるがごとくである。このようにしてその身を終えて、後世に名があるのである、という。張は万物の現象の中に発想を求め、心の感動をそれに託して表現したとするのである。張旭は十二筆意という書の古法を顔真卿に伝えたという説がある。たしかな事実かどうか問題はあがあるが、しかし、これは魏の鍾繇の伝えた十二意とほぼ同様の書法であって、この中からは新しい書法は見出されない。それよりも折釵股とよばれる釵の柄のような形から発想した書法がこれの得意としたところであるという、これは釵の柄の倒立したような形の書法が、今伝わるその法帖の中に見られるので、あるいはこういうものをさすかと思われる。とにかく公孫娘の巾舞という当時流行の的となった演戲を題材にとり入れて、最新の感覚を盛りあげた奇想天外の狂草をつくって、世の視聽を集めたというのが実態ではなかったかと思う。

この点は絵画においても同様で、やはり開元、天宝のころに出た吳道子は、はじめ張旭と賀知章について書を学んだが、成就せず、ついで書

をすてて画に進んだ。しかし、すでに書法は身につけていたので、それを画の上にも応用して、新しく線書きの妙趣の出る白画をかき、その中に張旭などから学んだ草書の減筆の書法を取り入れたという。とくに開元のころ、裴旻の剣舞をまうのを見て、それによって画法が進んだという。裴旻は勇猛無比の將軍で、双剣を持って舞うことができた。この剣舞を見て呉道子<sup>ごどうし</sup>が画法を体得したというのは、張旭が公孫娘の剣器を見て書法を悟ったのと同じの方法である。裴將軍の舞といえども当時の評判のものであったらしく、のちに唐の文宗のとき、李白の歌詩と、裴旻の剣舞と張旭の草書を三絶と称したという。また、顔真卿の書した裴將軍詩というのも伝わっている。顔の筆蹟としては問題はあるが、この將軍の話は唐の革新派の書人たちとかかわりがあり、それらの書風が、当時の世上の興趣の集中する人気の中から求められていることが注目される。

顔真卿は張旭から十二筆意を授かったが、これは魏の鍾繇<sup>しゅうぎょう</sup>以来の伝統的な書法である。顔はむしろこういう古い筆法の形似に陥らずその本質を取ることで、新しい書法を開拓した。王羲之<sup>わうぎし</sup>を俗書とのしって、自ら篆隸の古意に基いて筋骨の露出した、精神力のすぐれた書を書いた。作には碑と法書とあり、碑は楷書により、剛毅と嚴肅さにすぐれ、法書における真行草は自然な韻致を備えた絶妙さに卓出した。顔には張旭のような狂逸さは見られない。ただ、その作と伝える裴將軍詩は、張旭に言う折釵股<sup>せち</sup>に対し、屋漏痕<sup>りゅうこん</sup>、壁垢<sup>へいこう</sup>といったたぐいの物の発想から出た奇異な書を示している。顔の時代の背景から見れば、こういうものも皆無とは言い切れないところがある。つぎに出た懷素は張旭を学んで、おなじく狂草によって世の名声を博した。これもまた、空をゆく夏の雲の奇峯を見て書をかくという新しい発想によって書をかき、張旭と同じく酒酣に興趣を発してはじめて書が成り、さらに世の觀客を前にし、多くの当時の詩人たちに謳歌されるところとなるなど、隱逸な高士とは異なって、かなり俗惡な面をも備えている。

唐代の盛唐以後において、張顥素狂とよばれる狂逸の草書があらわれるころ、この書風を喜ぶものはこれのみにとどまらず、当時の詩人が草書を称賛した作を見ると、<sup>あき</sup>寂然<sup>しやくぜん</sup>の陳氏童子草書歌とか、顧況<sup>こきやう</sup>の蕭郎草書歌とか権徳輿<sup>こんとくご</sup>の馬秀才草書歌など多くの他の草書の名手を歌っている。その中でさきの高閑<sup>こうかん</sup>について<sup>あき</sup>光上人<sup>こうじやうじん</sup>とか<sup>あき</sup>亜栖<sup>あき</sup>などという<sup>あき</sup>緇流<sup>しやうりゅう</sup>のうちにもこの種の人々があり、晩唐にかけて狂草体の書が一時の流行となっていたのをうかがうことができる。

このような新しい革新的な書風について、これを取りあげて理論づけ、さらにその精神を高く称揚したのは、北宋になって、ようやく宋の文

化の安定した仁宗朝以後のことで、歐陽脩、蘇軾、黃庭堅という人々によって、唐の顔や張、素や五代の楊凝式がさらに新しいよみがえったような力をもって、これらの人々の書の基本的な書論の中に導入されてゆく。

歐陽脩は顔の書に、その書とともに人格を取り、書は人を以って存すると考えた。その門に出た蘇軾も、韓愈の人物を尊敬し、書の本質に帰り、同じく顔の書とともにその人物を取り、書は古人を模倣せず、書には神氣骨肉血の五要素があるとし、書は人間性の発露であるとした。黃庭堅は張旭、懷素、楊凝式の俗気のないところを取り、数十年の草書三昧に入って、ついに超越絶塵の高妙さに至った。そしてその高妙さは晋人において見られると説いて、書の理想を晋人にまで求めている。

米芾はこのような人々の新しい氛圍氣中に出たが、本来の好古癖から、真蹟を求めてその鑑賞を主とし、臨模の功を積んで研学につとめた。その広く高い鑑識と、容易に見ることのできない晋唐の名蹟をあますところなく鑑識した臨模したことによって、自ら天成による平淡自然の妙境を最上とし、それを晋人にあるとして、晋人の真蹟を求めて、それによってその神髓を明らかにしようとした。かれの目標とするところが晋人にあり、唐の顔真卿、柳公権は醜怪惡札の祖とまで極言している。しかし、これは概括的に論じたので、顔以下の革新派の書人の筆跡については、よく名品を選び、精到な鑑賞を行っていることは、以下の書史等の記述によっても明らかである。

絵画において、吳道子は前述のとおり、開元、天宝時代の風潮から出た新しい傾向の画人で、書における張旭と同類であるが、五代から宋にかけて発達してきた水墨山水画では、李成、范寛、関仝のような人たちが主流をなしている。これらはすべて本格派の山水画家である。これと同じころに董源、巨然があったが、これは米芾のころまではさきの三家には加えられていなかった。米芾になって董源は平淡自然の妙を得ているとして取りあげる。そしてそれに次ぐ巨然も明るみに出ることになる。ここで董源に取ったのは、水墨の雲烟に天成の美しさを見出し、それを天真を得ているとし、とくにその平淡自然さを尚んだのである。これは書において晋人の真蹟を見てそれに平淡天真の妙があるとし、書の極致をここに求めたのとは一致するものである。

米芾は、顔以降の書を醜怪惡札の祖と罵ったが、その評語を見ると、顔や張、素、楊凝式にもみな平淡自然の妙を目標として少しでもそれに近づくものは称賛を惜しまないことはその言葉の中にうかがうことができる。

書史、宝章待訪録に収めた顔以下革新系の法書の数はかなりの数に上る。以下その一々について注釈と考証を記すこととしたい。

張 旭

張顥絹帖一卷 書史7（数字は百川学海本の頁数、以下同じ）

また、歐陽詢の故事十餘帖がある。老年の筆で、連綿して書かれている。その子歐陽通の書いた評書一卷と張顥（張旭）の絹帖一卷、そのなかの七八帖は若い時の書であるが、いずれもみな李孝広の処にある。

注 原文「七八帖乃少時書」は張旭の絹帖について言うのであろう。李孝広は李廸（九七一—一〇四七、字は復古、宋史三一〇）の孫。

少時絹上草書兩幅 書史12

馮京の家に、懷素が絹の上にかいた詩一首と張伯高（張旭）が若い時絹の上に書いた草書二幅を收藏している。張の書は今、薛紹彭のものとなっている。

注 馮京（一〇二一—一〇九四）、字は当世。江夏の人。官は翰林學士、知開封府となった。宋史三一七に伝記がある。薛紹彭、字は道祖。号は翠微居士。河中万泉の人。官は秘閣修撰知梓潼路漕に至った。米芾とは書画の交遊において、もっとも親密であった。法書の鑑識に秀でていた。

真迹四帖（旧有五帖） 書史13 待訪録3

唐の率府長史の張顥、字は伯高の真迹四帖は杭州陸氏大姓の家にある。もと五帖あった。第一「秋深」、第二「前發」、第三「汝官」、第四「昨日」、第五「承顔」がそれである。今、存しているのは四帖である。汝官帖ののちに、古い印がある。印文はよく分らない。「昨日」と「承顔」の二帖は小襞紙を用いている。陸氏の子は、素より関景仁について学んでいた。関はそれで陸氏からこの帖を借りて三大帖を摹した。私は幼少のころ、石本を関中の宋氏のところで見ることがある。私が桂林に仕官するようになって、そこへちょうど関杞が使者となってやってきたとき、この帖のことが話題に出て、はじめて石が関氏にあることがわかった。また、五年たって、私が潭に仕官したとき、関杞は邵州の通判となっていた。そのときその拓本を送ってくれた。また、三年たって、杭に仕官したとき、関景仁は錢塘の令（長官）となっていた。そのころ、陸氏の子で進士の試験に及第したものが面接しにやってきたので、関とともに陸氏のところへ往き、拝観することができたが、第一の「秋深帖」だけはなくなっていた。どうしてかとわけを詰問すると、顰蹙して言った「嘉祐年間に、太守の沈邁が借りて行ったままです」と。私はそこで職人

をつかわしてのこりの帖を摹写させ、さっそく帰ってそのとき郡の従事をしていた邁の弟の邀にといただと、その姪の沈延嗣のところに在るという。私はそこへ出かけて、やっと見る事ができた。そののちこれを買いたることができた。

注 関景仁、字は彦長。錢塘の人。魯の子。嘉祐四年（一〇五九）進士。宋詩紀事二二に見える。沈邁、字は文通、錢塘の人。皇祐元年（一〇四九）進士。官は龍圖閣直學士知開封府から翰林學士に至った。宋史三三一。詩文をよくしたので著名。宋詩鈔、宋詩紀事一八。

この条によると米芾が桂林に仕官したのち、五年をへて潭に転じ、また、三年をへて杭州に移ったという。この辺の年代は年譜に照してもはっきりしない。ところがこの条は待訪録にも載っていて、多少文章が異なっている。待訪録では、「余昨見石本于鎮戎軍。及冠官桂林。朝奉大夫関杞為使者。語及。始知石在関氏。二十五官潭、杞通判邠州。以石本見寄。三十五官杭。而景仁為錢塘令」とあり、これによると元服した二十歳のころ桂林に官し、二十四歳のとき熙寧八年（一〇七五）潭に官し（長沙掾となったこと）、三十五歳、元豐八年（一〇八五）杭州に官したことになる。これは杭州の従事となり淮南の幕に入ったことをいう。待訪録の方が記事が詳細で年譜もはっきりする。また、これによって若いころに張旭を鑑賞していたことがわかる。

五帖の中、秋深帖は董其昌の戲鴻堂法帖中に刻されている。秋深不審氣力復如何也云々の帖で首行四字は楷書でかき、あとの十二行は草書である。とくに「氣力復如何也」六字をいわゆる一筆書のように中断することなく一氣に連綿して書いているのは注目を要する。

原文「陸氏子素」の素字は陸氏の子の名かあるいは素よりと読むか不明。しばらく素よりとする。原文「独失秋深一帖」の失字は待訪録になく、待訪録では秋深帖だけが残っていたように解釈できる。今、原文に従う。

# 虎兒等三帖 書史13 待訪録5

張伯高（張旭）の虎兒等三帖、楮紙に書かれている。真迹ではない。王詵の家にある。蘇氏の物である。黃魯直（黃庭堅）が小兒に贈った詩に、「我に元暉古印章あり、印は<sup>すゐ</sup>刑<sup>な</sup>って諸を郎に与うるに忍びず。虎兒は筆力能く鼎を扛ぐ。字を元暉とし阿章を継がしむ」という。これを取って故事とするのである。

注 王詵、字は晋卿。太原の人。英宗の女、魏国大長公主を尚<sup>たて</sup>り、駙馬都尉となった。詩、書画みな工みで蘇軾と親交があり、宝繪堂を作り、古今の書画を収蔵し、蘇東坡が宝繪堂記を書いたので名高い。米芾とも交遊し、晋賢十四帖を所蔵していた。本文の蘇氏は不明であ

るが、普通には蘇舜元、舜欽兄弟およびその子の澥とか泌などの家をさすことが多い。黃庭堅の詩は山谷詩集下に見える。戲贈米元章詩二首の中にあり、予章黃先生文集卷九に見える。米芾がその子友仁（虎兒）に、古印の元暉とあるのに基いてあざなを贈ったことを歌った詩である。虎兒筆力の句は張旭の帖に米友仁の呼名を懸けていったのである。この帖のことは待訪録にも簡畧に記されている。

賀八清鑑帖 書史13 待訪録7

張伯高（張旭）の賀八清鑑帖は、楮紙の真迹である。字法は勁古で、他の書に似ていない。世間にある伯高の第一の書である。蘇液の家にあり、世に石刻が多い。のち、章惇の家のものとなった。

注 待訪録では、唐張右史季明賀八清鑑等帖と題して「右楮紙真蹟。筆法勁古。不類他書。世間季明第一書也。承議郎蘇液處。世多刻石」とあり、季明第一書也とあるのが異なる。季明は張旭のあざな伯高のほかに季明というのがあったことになる。この帖は今、見ることでできないので、内容を知るわけにはゆかない。張旭に対して賀と言えば賀知章を想うが、内容は不明である。章惇（一〇三五―一一〇五）字は子厚。浦城の人。蘇州に住した。嘉祐四年（一一〇五）進士。王安石に重用された政治家として著名な人物。宋史四七一。宝晋英光集八に「張顛書賀八清鑑。風流千載人也。帖凡七紙。蘇太簡家物。液獻章子厚也」とあり、蘇易簡の家に伝わり、蘇液が章惇に献上したものであることがわかり、蘇液はこの蘇家の一族であることは誤りはないようである。蘇澥、泌、激などと同じ排行にあった人物であろう。宝真齋法書贊五、懷素千文帖の条に「液は蓋し太簡参政の曾孫にして蒼国老の孫なり、藏書精鑒、本朝第一と為す」とある。

賀八清鑑帖 書史26

蘇州邵元伯は中允（官名）の子。蘇沂の摹した張顛（張旭）の賀八清鑑帖を収蔵している。真物と更に少しも異なるところはない。また、懷素の自叙帖を摹している。かつて私の家のものであったが、今、友人の李錚のものとなっている。まったく真迹を見るようである。

注 李錚は宋詩記事三三に、字は希声、紹興年間、秘書丞となった人物がある。あるいはこの人か。邵元伯、蘇沂は伝記未詳である。

全本千文 書史13 待訪録13

伯高（張旭）の全本千文。曾孝蘊は、京師謝氏の処にあるという。謝氏は景温宝文（謝景温）の遠い親族である。

注 張旭には草書千字文の残本が集帖に刻されている。これと同一本かどうかは不明であるが、おそらくこれも草書であろう。曾孝蘊

米芾書史所載唐革新派書考

は、字は処善。晋江の人。孝広の弟。宣和の初に、天章閣待制知歙州の官にあった。宋史三一二。謝景温は、字は師直。富陽の人。絳の次子。皇祐元年（一〇四九）進士。王安石と親交があり、侍御史に拔擢された。官は宝文閣直学士となったので宝文と呼ばれている。

張旭の千字文については、著録では式古堂書畫彙考に、宋の董道の題跋三則を掲げている。革新派の論理をよく説いた言葉である。清の吳栄光の筠清館法帖には草書千字文の残字四十三字を刻しているのは、董氏の評語によく当たっている。左にその一則を掲げておく。

「觀其書者。如九方皋見馬。不可留於形似之間也。方其酒酣興來得於意會時、不知筆墨之非也。忘乎書者也。反而内觀。龍蛇大小。絡絡其中、暴暴乎。乘雲氣而迅速。盲風異雨。驚雷激電。交怪雜出。氣蒸烟合。倏忽万里。則放乎前者。皆書也。豈初有見於豪素哉。彼其全於神者也。」（広川書跋）という。又、東觀余論にも千字文跋一則がある。

張長史千文三帖 待訪録11

右同上模石。乃ち李師中である。洛陽の人。

注 珊瑚網二二には、「右同上」を「在唐炯処」に作る。唐炯の所蔵であったことになる。唐炯は、字は林夫、錢塘の人。硯録の著者の唐詢の子。王安石の新法を支持して、安石に用いられ崇文校書の官にいたが、のち潮州別駕に貶せられた。書をよくしたので知られる。宋史三二七。蘇東坡の「書唐氏六家書後」の一文は、唐炯が所蔵する唐代の六名家の書を持参して、東坡に批評のことばを書くことを求めたのに答えたもので、その末尾に「林夫の書は我に過ぐることを遠きに、反って予に求むるは何ぞや」と言い、唐炯の書の工みなことを戯れに述べている。李師中（一〇一三—一〇七八）字は誠之。楚丘の人で鄆に住した。官は熙寧年間のはじめ、天章閣待制を拝した。旧法党に属し、不遇で終った。宋史三三二。原文「乃李師中也」は意味がはっきりしないが、多分模刻をした人のことではないか。

千文両幅 書史14

唐炯のところにある黄楮紙の伯高（張旭）の千字文二幅は、刁約の家の二幅と同一である。これは張旭の晩年の真迹である。毎に六七字を并じている。刁氏の蔵品には、のちに李王（南唐李煜であろう）との跋がある。人のために「建業文房之印」を偽刻して之を印し、合縫印（紙のつぎ目の印）の破れた印文を連ねている。見るたびごとに歎息するばかりである。

注 唐炯は前注に見える。刁約は、字は景純。潤州の人。湛の子。天聖八年（一〇三〇）進士。宝元年間（一〇三八—三九）、館閣校理



となり、知宣州、越州の官を歴任して、刑部郎中、直史館となった。蘇東坡が「景純墓文」を書いている。宋史翼一、京口耆旧伝などに伝記があり。米芾も元祐三年（一〇九三）潤州に在ったから、そのころの交遊が考えられる。原文「連合縫印破字」は「建業文房之印」の印文を紙縫から求めてつなぎ合せてつくっている意ではないか。原文「每辯六七字」は解し難い。狂草体の書がよみにくく、いつも六七字を弁別している程度であるの意か。

#### 伯高五帖 書史 14

伯高（張旭）の五帖。黄経紙をもちいている。若いときの書である。その辞に「往往興来、五指包管」などというのがこれである。楊傑の家にある。傑父は草書を学んだ。故に、これを収蔵していたのである。言葉のきれたところで剪って一軸としている。黄色い油拳の経紙をもちい、王仲至（王欽臣）所蔵の伯高の千文と同一である。みな古い印や跋はない。伯高の名は廟諱字を犯している。私は皎然の詩集の中にこれを見出した。

注 楊傑、字は次公。無為子と号した。無為の人。嘉祐四年（一〇三七）進士。官は元祐年間に礼部員外郎となり、知潤州をへて両浙提点刑獄となった。宋史四四三。王仲至は王欽臣のこと。字は仲至。宋城の人。王洙の子。進士に及第し、哲宗のとき、集賢殿修撰となったが、元祐党籍に入り、不遇であった。徽宗朝になって待制の官に復した。平生文章を善くし、蔵書数万卷、広く名士と交遊した。宋史二九四。原文「伯高名犯廟諱字」は張旭の名の旭字が時の天子哲宗の名の煦に近いことを言うであろう。唐の皎然の詩は皎然の詩に張伯高草書詩一首があるのをさす。全唐詩二一に次のように見える。「伯英死後生伯高。朝看手把山中毫。先賢草律我草狂。風雲陣發愁鍾王。須臾交態皆自我。象形類物無不可。閨風遊雲千万朵。驚龍蹴踏飛欲墮。更觀鄧林花落朝。狂風亂攪何飄飄。有時凝然筆空握。情在寥天獨飛鶴。有時取勢氣更高。憶得春江千里濤。張生草絕難再遇。草罷臨風展輕素。陰慘陽舒如有道。鬼狀魑容若可懼。黃公酒壚興偏入。阮籍不嘖嵇亦顧。長安酒勝醉後書。此日騁君千里步」。宋の陳思の書苑菁華にも見える。原文「傑父」は傑甫の意であろう。傑の父とは解し難い。

#### 張顛草書 書史 14

蘇之純が張顛（張旭）の草書を所蔵している。また、蘇泌の房に所蔵するところのものは、辞句に「国士何日得南中」とある。みな伯高の真迹ではない。また、古い印や跋もない。

注 蘇之純は蘇舜賓の子に蘇澄があり、蘇澄の子に蘇之純がある。蘇泌は蘇舜欽の子。蘇家の人々は米芾とは親交があった。

張顥書 書史21

その後、余の家の十七帖、日本書及び日本告、吳融、司空圖が晉光に贈る歌、張顥、晉光、亜栖等の書、韓幹の馬図、戴嵩の牛図を手に入れた。

注 劉涇の收藏を述べた一節の部分である。ここに記される晉光、亜栖はいずれも懷素の狂草を承けた人々である。唐の詩人、吳融が晉光に贈った詩は、「贈晉光人草書歌」と題して全唐詩六八七、および書苑菁華一八に収めている。次の通りである。

「篆書朴。隸書俗。草聖貴在無羈束。江南有僧名晉光。紫毫一管能顥狂。人家好壁試揮拂。瞬目已流三五行。摘如鉤。挑如撥。斜如掌。廻如幹。又如夏禹鎖淮神。波底出來手正拔。又如朱亥鎚晉鄙。袖中抬起腕欲脫。有時軟繁盈。一穗秋雲曳空闊。有時瘦嶮巖。百尺枯松露槎枒。忽然飛動更驚人。人聲霹靂龍蛇活。稽山賀老昔所伝。又聞能者惟張顥。上人致功応不下。其奈飄飄滄海辺。可中一入天子国。絡素裁縑灑毫墨。不繫知之与不知。須言一字千金値」。

司空圖の詩は全唐詩司空圖の条にはない。書苑菁華一八に「送草書僧晉光帰越」と題し、送別の一文が収められている。その文中に「晉光僧。生於東越。雖幼落於佛。而学無不至。故逸迹遒勁之外、亦恣為歌詩。以導江湖沈鬱之氣。是佛首而儒其業者也」とある。

顔 真 卿

争坐位帖 書史10 11 待訪録7

争坐位帖は唐の畿隄の獄状を用いて書いたものである。礎熟紙をもちいている。韓退之は、生紙を用いて文章を書くのを不敏（不謹慎）としている。生紙は草稿に用いるものでなければならない。帖内の小字は行間に注を書き添えたものである。書ききれないときは行の下部の文字の書いてない空紙のあたりに、横書きしている。この点は刻本と同じではない。この帖は顔の書のなかでは、もっとも傑作である。その忠義の精神が憤発して、頓挫鬱屈し、意は字に在らず、天真がすっかりそのままこの書のうちにあらわれているのが、よいのである。石刻ではただそのあらましが存しているだけである。私はわかいころ、一本を臨書したことがある。その本がどこに在ったかは記憶していない。そののち二十年

をへて、宝文館学士の謝景温が京兆の尹となったとき、私につけて大豪の郭氏の一族の一軒がこの帖を手に入れたといふので、八十万銭の高価をつけたといふ。そこでこの帖を見ることができた。これには紙縫に「元章戲筆」といふ字の印があり、中間の筆気には、ひどく私の書に似たところがある。面前でこれにこのことを言ってきたが、所蔵者は、私の家に代々久しく収蔵してきたものであるから、あなたの言葉のとおりとは思われないと言った。

注 争坐位帖については待訪録に、

顔魯公郭定襄争坐位第一帖

右、楮紙の真蹟。先豊県の先天、広徳（唐代年号）中の牒を用いて起草している。禿筆で、字ごとに意が相連属して飛動し、詭形異状（さまざまに変わった文字の形態）は、意の外において得られている。世に行われる顔真卿の行書の第一の書である。縫（紙のつぎ目）に、「顔氏守一図書」といふ印文の印がある。宣教師安師文の処にある。安氏は長安の大姓（豪家）である。解鹽池句当官となり、携えて京に入り、装背しようとしたとき、私はこれを見ることができた。安はこういつていた。季明文と鹿脯帖は自分の家に在るといふ。争坐位帖の原蹟について述べた記事で、拓本に依るほかはない今日では、貴重な内容をもっている。

責峽州別駕帖 書史1011 待訪録8

峽州別駕帖。白麻紙をもちいる。真字（楷書）である。本文に「疎拙抵罪。聖慈含弘。猶佐列藩。不遠伊邇」とあるのがこれである。字は糾宗碑に似てたいそう清らかである。また、祭濠州使君文（祭伯文稿）、鹿肉帖はならびに魯公（顔真卿）の真跡である。

注 この帖は待訪録では疎拙帖という。忠義堂帖に峽州帖の名称で刻されているのによって見る事ができる。重厚な楷書で、顔の作のなかでも卓出したものである。待訪録には、顔真卿疎拙帖。右、麻紙の書。真字。清勁秀発する。李大夫と同時に書かれたもの。顔の責峽州別駕帖ともいい、これこそ顔の第一帖である、という。百川学海本の待訪録には「与李大夫同時」の同字がない。今、珊瑚網本に依って補正した。簡畧にすぎた文意がやや取り難いが上記のように解した。李大夫は、朝廻帖、鹿脯帖、峽州帖みな李太保大夫宛ての書簡であり、李大夫を李太保大夫と解すれば、みなこれらと同時に成ったものであろうといふのである。

祭豪州使君文は、祭伯稿のこと。今、甲秀堂帖等に刻されたのを見ることが出来る。鹿肉帖は一に鹿脯帖という。今、忠義堂帖に刻され

たものがある。式古堂書畫彙考八に鹿脯帖を著録し、諸家の題跋を掲げている。黄山谷の題跋には安師文所蔵の本を見ている。明代になると汪氏の珊瑚網にはこの帖に三本あり各本字形大小不同であることを述べている。一は天台、謝奕脩養浩齋所蔵のもの、一は宋の李觀察士衡の家であり、今、王辰玉の所蔵のもの、一は王冲隱題跋のあるもの。王は名は持、字は正叔、長安の人、という。糾宗碑は、臧糾宗碑のこと。集古録に見える。大曆十二年（七七七）立碑。

不審、乞米二帖 書史10 11 待訪録3

唐太師顏真卿の不審、乞米の二帖は、蘇渼のところにある。背縫に吏部尚書銓の印がある。安師文の家の争坐位帖と責峽州別駕帖と紙縫の印が同一である。

注 不審帖、一名朝廻帖、および乞米帖は今、忠義堂帖（宋、嘉定八年（一二一五）劉元剛刻石）に刻されているのによって見ることができる。米芾の見たのは真蹟本であろう。蘇渼は蘇舜元（一〇〇六—一〇五四）の子。待訪録では「朝請郎蘇渼。度支郎中舜元子」とある。吏部尚書銓の氏名は未詳。待訪録にはさらに、「得于閩中安氏」。士人多有臨搨本。此卷古玉軸。縫有舜元字印。范仲淹而下題跋。某嘗十餘閱」とあり、閩中の安氏、（師文）から手に入れたという。蘇渼が入手したのが安師文からというのであろう。詳細は書道芸術四参照。

魯公二帖 書史11 待訪録9

山陽の簿（官名）張君は、齊賢丞相の後裔である。魯公二帖を収蔵している。本文に「奏事官至」とあり、また「為憲之功」という。後帖は、「張淑郎官の辟を求むる」とある。乞米帖及び李太保帖に似ている。

注 張齊賢（九四一—一〇一四）字は師亮。曹州冤句の人。真宗の時、兵部尚書、同中書門下平章事に至った。宋史二六五。二帖は忠義堂帖等集帖には見当らない。待訪録には「顏真卿与李大夫奏事張淑二帖」とあり、二帖は李大夫（李太夫）に宛てたものである。忠義堂帖の捧袂帖に、中郎張淑の名が見える。同じく李太保大夫宛である。おそらく同類のものであろう。この条に乞米帖、李太保帖とある李太保帖は、李太保宛のものが一通に留まらないので、どれをさすか不明である。顏魯公文集に李太保帖九首として九首の李太保大夫宛の書簡を掲げている。

顔魯公集四、李太保帖九首の中に「奏事官至」で初まる一帖があり、中間に「為憲之功」とあり、李太保大夫宛てであり、この帖をさす  
と見て誤りはない。おそらく刻帖があるであろう。顔魯公文集二四に奏事は捧袂帖であるとしているのは当たらない。

文殊一幅 書史 12

蘇之才が碧牋の文殊一幅を収蔵している。魯公（顔真卿）の妙迹である。また、与夫人帖一幅がある。夫人とあるはきっとその嫂にあてたもの  
にちがいない。今、王詵の家にある。

注 忠義堂帖に文殊帖と与夫人帖とが刻されているので見ることができる。文殊帖には羅振玉旧蔵の真蹟本があるが、忠義堂帖の方を取  
りたい。書道芸術四参照。

顔魯公頓首夫人 待訪録 5

右、真蹟。楮紙。半分以上破爛している。

駙馬都尉王晋卿（王詵）の家にある。

注 忠堂帖の与夫人帖は真卿頓首ではじまり、夫人閣下宛となっている。ここに言う頓首夫人とはこの帖のことであろう。所蔵者も前項  
と同じく王詵である。

寒食帖 書史 12 待訪録 12

魯公（顔真卿）の寒食帖は綾紙に書かれている。錢鏐の処にある。世上に石刻が多い。

注 寒食帖は快雪堂帖、襄梨館帖などに刻されている。「天氣殊未佳、汝定成行否。寒食。只数日間得且住。為佳耳」二十二字四行の行  
書帖である。今は刻帖で見るとよりほかはないが、米芾は綾本に墨書したものをしている。待訪録にも載せ、中書舍人錢鏐としている。錢鏐  
（一〇三四—一〇九七）字は穆父。錢塘の人。元祐の初に知開封府となり、のち翰林學士となった。詩文を善くし、藏書に富み、行草の書  
にも工夫であった。米芾とは親交があったようである。宋史三一七。

天氣殊未佳 書史 30

天氣殊未佳は顔魯公の帖である。綠棗花綾表装がされている。これは唐人の双鉤填墨で、圈（輪廓）は深く、墨は浅い。一たい、金玉で器を

米芾書史所載唐宋新派書考

作るに、これを毀せばもう一度作ることができる。書の場合にも、いずれの時代にも書の工みな人はないとは言えない。しかし、もし自分が生きていて、もう一度同じものを書いて、かならずしもまたものように工みに書けるとは限らない。というのは、天真自然というのは、予想することはできないからである。字形の大小を想いうかべて書をかいたりするのは、よい議論とはいえない。この中の妙味を知ろうとするならば、懷素がみずから言ったことばに「初より知らず」とあるのこそ妙境に至ることばである。一度作った作を、またもう一度作ったところで、ふたたび得られるものではない。とすれば、原本を搨模して所蔵するのも、けっして見苦しいことではない。

注 天氣殊未佳帖は前条の寒食帖のことである。懷素が自ら初より知らずと言ったことばは自叙帖に見えることばである。

魯公一軸五帖 書史12 待訪録13

魯公（顏真卿）の一軸五帖、石裔に会ったら、兄のところに在ると言っていた。石裔は駙馬副車の孫である。

注 待訪録には、「右見湖州巡檢供奉官石裔駙馬之孫云在其兄処」とある。石裔および駙馬副車は未詳。

送劉太冲序 書史11

送劉太冲序、これは碧牋に書かれている。王欽臣の旧蔵品である。帖のちに王参政（王堯臣）の名印がある。王（欽臣）は言う。唐炯の所蔵するものとともに二種あるがために、おのおのが誤って巻をとりちがえてもって帰ったりした。唐炯はそこで「才不偶命而德其無鄰」の字を剪りとった。碧牋は墨書するのにふさわしく、神彩が艶発し龍蛇（草書のすがた）が生動し、見る人の目を驚かす。装背（表装）をしないで、背紙をめくりとり、厚い紙で散巻する（紙をうらうちしないであててまく）。これで十分見分けがつくようになったので、ちょっと一度出しただけですぐ巻いてしまった。唐炯の子が、智永の千字文、柳公権の書柳尊誌と歐陽詢の鄱陽帖とともに、父の墓に葬った。まことに惜しいことである。ある人は、ひそかに王詵に買ってゆかれたともいう。

注 送劉太冲序帖には、淳熙秘閣統帖、忠義堂帖および戲鴻堂帖等に刻入されたものがある。別に墨書した本があり羅振玉が紹介している。羅振玉の本には詳細な考証をした題跋が加えられている。各本みな異同があり、米芾の見た真蹟本との関連はなお明らかではない。王参政は王堯臣（一〇〇三—一〇五八）であろう。書史の蘭亭三本の条にも王参政堯臣の跋を引用している。字は伯庸。虞城の人。天聖五年（一〇二七）進士。知制誥、翰林學士から樞密副使、参知政事となった。智永の千字文、柳公権の書柳尊師墓誌と歐陽詢の鄱陽帖について

は書史中に別に記事がある。

顔魯公文集二六に送劉太沖叙について諸文献を載せている。書道芸術四参照。

臨顏書太沖序 書史21

劉涇が宿州に在ったとき、平生初めて白麻紙臨顏書太沖序を収蔵した。かれの秘笈の第一の物である。

注 顏書の送劉太沖序の臨書である。

唐太師顏真卿書送辛子序 待訪録2

右、真蹟、楮紙の書。宝文閣学士謝景温の処に在る。前後に好事者が筆で二大印を描いているが、その文字が乱れている。仍ち鉉字を書しているが、その中は幸いに縫（つぎ目）に合していない。鑒するに鉉の筆ではなく、たいそう墨宝を傷つけるものである。私は潭において宝文を補佐していたころ、しばしば観賞したことがある。

注 米芾が熙寧八年（一〇七五）から数年間長沙掾をしていたころのことであろう。

顔魯公文集五に送辛子序がある。辛子は辛晃のこと。隴西の人。原文「其中幸不合縫」の意は不明。

朱巨川告身 書史11

朱巨川告身は顏真卿の書である。その子孫の灌園がしばしばこれをたずさえて秀州の崇徳邑中に入った。しかし、これをもっているも仕官の恩典もなかった。私はこれを金校と交換した。また、一つの告身は、徐浩の書に似ている。邑人王衷のところにある。これも朱巨川の告身である。劉涇は私の所蔵する顏真卿書の告身を手に入れた、背紙（うらうちの紙）の上に、五分の墨がある。今でも表装して秘玩としている。しかし、徐浩書の告身は、ほぼ徐の書法があるだけである。（徐浩の書と決めるほどたしかではないの意であろう）。王詵は私と親しく交際している。この徐浩書の告身をたいそう愛して、ある日、私に、どうしてもこれを手に入れたいと申し出た。そこで韓幹の馬図と交換した。馬図はついで私は劉涇のところで一つの石と交換した。この告身は今でも王詵のところにある。

注 顏真卿の朱巨川告身は停雲館法帖に刻されているものがある。唐の建中三年六月十六日に下されたものである。宋高宗の御府にあったもので、宣和書譜に記載されている。元の鄧文原および喬實成の跋語各一則を付刻している。いずれも顏真卿の書として称賛している。

米芾書史所載唐革新派書考

汪氏珊瑚網にはこの真蹟巻を著録し、元の正徳丁丑の陸完の長跋を載せている。考証は綿密である。そのほか明末の王錫爵、董其昌、陳繼儒、王衡の諸跋をもっている。この帖は清の内府に入り三希堂法帖にも同一のものが刻されている。徐浩の朱巨川告身は大暦三年八月四日付のもので、今、台北故宮博物院に真蹟本があり、すでに写真版等でも紹介されているものがある。故宮書畫録にも著録されている。帖後に元の鮮于樞、張晏および明の董其昌の題跋がある。董其昌は戲鴻堂帖中にこれを刻入している。そのほか馮銓の快雪堂帖等にも刻されている。ただ、米芾は徐浩に似ていると言ひ、徐浩の真蹟とは言っていない。書道芸術中国名品集参照。

王衷、字は秉忱、崇徳人。上書して直言したので貶せられ、孤山に隠居して了った。朝廷から召されても起たず、悟静処士の号を賜った。紹興五年に卒したという。あるいはこの人のことか。劉涇、字は巨濟。前溪と号した。簡州陽安の人。熙寧六年（一〇七三）進士。王安石の推薦により経義所檢討となり、元符の末年、職方郎中となった。詩文書画をよくし、米芾とも親交があった。

宋史四四三。顔魯公文集三〇に朱巨川告の諸文献を掲げている。

賜浙西節度旌節勅 書史25

王詵が詔勅を一通収蔵している。これは浙西節度の旌節を賜うときのものである。顔魯公（真卿）の前中書門下の詔勅とともに、今の制度の如くである。後に、郭子儀が名を書しているのは、人偏に下の一画がない。字は長く、月日を題している。「真卿」二字に至っては、名は今の落日押字の如くである。左手下角に孔目官の名がある。また、唐勅の制式を知ることができる。みな真書の署名をして花押をしない。今、紙片を前頭にはりつけて、勅字に連ねて落日の様式で押字を書くことは、常式の文牒の如くで、不敬に似ている。三公（郭子儀をいうのである）は第一等であり、人がおのおの名を書しているので、大紙吏文でも収蔵するねうちがある。

注 落日押字は不明。

顔魯公文集一に謝浙西節度使表付肅宗批答がある。乾元二年（七五九）六月のもの。おそらくこの時の勅書であろう。

南州刺史告 書史25 待訪録4

許彦先に南州刺史の告身がある。それに書かれている「真卿」の二字は、吏部尚書の時の字であり、たいそう淳勁である。

注 待訪録に、「唐太師顔魯公書名兩字、右真蹟書、嶺南刺史綾告。在朝奉郎臨江許彦先処」とある。許彦先は字は覺之。始興の人。天



聖二年（一〇二四）進士。梓州轉運判官、広南東路轉運使などを歴任したという。あるいはこの人か。吏部尚書になったのは大暦十三年（七七八）から十五年までの三年間で、七十歳以後の晩年に当たっている。

顔魯公書韻海 待訪録<sup>11</sup>

右、大書した朱字と聞く。魯公の書。小字は他人の作である。蘇駒のことばにその父刑部尚書の処に在るといふ。

注 顔魯公文集二八に聞大書朱子の朱子は朱字に作る。今、訂正する。蘇駒は伝記未詳。韻海二字を朱で大書したものであろう。韻海は韻海鏡源ともいう。顔真卿の撰した字書の名称。今、漢学堂叢書に輯本が存している。詩人釈皎然が韻海の編修の成ったときの奉和の詩等がある。又、清の呉綺に韻海樓詩がある。

跋顔書 英光集補遺<sup>5</sup>

顔真卿は褚遂良を学んだ。すでに成就して、自ら挑踢（はねる筆法）の書法で名を知られるようになり、作品もたいそう多くつくられたが、平淡天成の趣きがない。この帖（何の帖か不明）はとりわけ褚法が多い。石刻では醴泉尉のとき（天寶元年七四二）の作および麻姑山記（麻姑仙壇記、大暦六年七七一）はみな褚法である。ここでは特にその真蹟であることを貴ぶのである。争坐帖の比ではない。たいてい顔、柳の挑踢の書法は、後世の醜怪惡札の祖となるもので、これより古法は蕩として遺らなくなった。安氏（安師文）の鹿肉乾脯帖、蘇氏の馬病帖は渾厚純古で挑踢がない。これこそ刑部尚書のときの（広徳二年、七六四）合作である。意気が紙札を得て精となるを合作という。この帖は筆気が鬱結し、條暢せず、逆旅の中で書したものである。李大夫というのは、名は光顔といい、唐の功臣である。崇寧丙戌六月六日従九品下米芾記す。

注 この跋語は李大夫の名が見えるので李大夫宛ての尺牘の跋語と思われる。そして李大夫は李光顔（七六二―八二六）のことという。

李光顔は唐書六一、新唐書七一に伝記があり、字は光遠といい、李光進の弟にあたる。その生没から考えると、光顔は広徳六年の生れであるから、顔の刑部尚書と峽州別駕時代の李太保大夫宛ての尺牘と年代が矛盾するので、李太保大夫を李光顔とすることはできない。清の王澐がこの点を考えて、李太保大夫は李光弼（七〇八―七六四）とした。この李光弼にしても、顔が峽州別駕の官にあった永泰二年（七六六）に李太保大夫宛の書簡があり、この年は李光弼はすでに没しているので、何かに誤りがあることになる。しかし、顔は李光弼太保の神道歌を書いているが、それには広徳二年七月に崩じて九月に太保を追贈されたところから、これも該当しない。両唐書の本伝も同様であ

る。従って李光弼と見ることも不適当である。なお後考に俟たねばならない。もう一人、李抱玉ではないかという説も考えたが、なお確定的ではない。書道芸術四に詳述した。

挑踢は姜夔の統書譜に挑剔と言っているのにあたるであろう。はねる筆法であるが、顔の場合は筆力が沈着で筆勢が豪毅であるがために生ずる力づよい筆法をいうであろう。統書語にも挑剔は沈実をたつとぶというのも、その挑剔の弊を蔵するために言っているのではないか。米芾が顔と柳公権をもふくめて、この筆法を醜怪惡札の祖と言ったのは有名なことばで、唐の後半期以降の書を取らなかったのもこの点にかかっているであろう。

懷素

自叙帖真迹 書史12 待訪録9

懷素の自叙帖の真迹は、蘇泌の家にある。前的一幅（一紙）は破砕してのこっていない。その父の集賢校理の蘇舜欽が自ら写してこれを補った。

注 自叙帖の蘇舜欽の家にあった真蹟本は現在、台北故宮博物院にあり、早くから紹介されているものである。前六行は舜欽が補書したものである。詳細は書道芸術五懷素自叙帖解説に述べておいた。

唐僧懷素自序 書史10 待訪録10

右、朝奉郎の蘇液のところにある。杭州の沈氏がかって板本に刻したことがある。泌も激もともに蘇舜欽の子である。蘇氏は参知政事易簡の子耆（九八七—一〇三五）、耆の子舜欽（一〇〇八—一〇四八）、舜欽の子激、四世好事であり、精鑒があった。ちょうど唐の張彦遠に匹敵する。以上の三事はならびに激がこれを見たと言う。

蘇沂摹懷素自叙帖 書史26 前出

千文絹本 書史12 待訪録7

懷素千文絹本真迹は蘇液の家にある。沈邁の家刻した板本はこれである。（真迹本は）のちに章惇の家に帰した。

注 待訪録には章淳の家に帰したことは記していない。懷素の千文には、今、草書千字文の真蹟本があり、紹介されている。世に千金帖と呼ばれているものである。宝真斋法書贊五、懷素千文帖の条参照。詳細は書道芸術五懷素千字文解説に述べておいた。

絹帖三帖 書史12 待訪録8

懷素絹帖、第一帖、「胸中刺痛」、第二帖「恨不識顔尚書」、第三帖「律公好事」、これは懷素の老年の筆蹟である。ならびに安師文の処にある。元祐戊辰の歳（三年、一〇八八）、安公はこの帖をたずさえてきて、吾が家に留ること一ヶ月余。そこで私はこの帖を臨学してのち返した。帖後に呂汲公大防以下の題記がある。今、章公惇に帰した。

注 懷素の藏真帖に「所恨不与張顛長史相識。近於洛下。偶逢顔尚書真卿」の句がある。ここに「不識顔尚書」とあるのは、あるいはこの帖のことか。「律公好事」は今、律公帖があり、玉烟堂帖等に刻されたものがある。呂大防（一〇二七—一〇九七）字は微仲。藍田の人。皇祐初の進士。官は尚書左僕射、門下侍郎となった。宋史三四〇。

待訪録には、「右絹帖云。貧道胸中如刀刺。第二帖、見顔公。第三帖、律公發懷素不与。世之第一帖也。亦見于師文」とあり、帖の釈文にやや異同がある。

絹帖一軸 書史12

懷素絹帖一軸、故事を雑論したものである。後世の人が二十余りに分断した。王詵が年月をかけて探し求めて、もとの数を充足して完全なものにした。また、一に「史陵者」というものがある。絹帖である。これを六朝古賢の一帖と交換して王詵に与えた。

詩一首 書史12 待訪録5

懷素の詩一首。絹の上に書かれた真蹟である。王鞏は交換して、王詵の家に与えた。

注 王鞏、字は定国。号は清虚居士。蘇軾と交わり、詩文を善くした。宋史三二〇。

絹上詩一首 書史12 前出 馮京所藏本

任華草書歌 書史12 待訪録7

懷素の書した任華の歌の真蹟。両幅あり、絹に書かれている。字法は清逸で、歌辞は奇偉である。王詵の家にある。詵の言葉によると、尚方

にはそののちの三幅があるという。

注 任華の懷素上人草書歌は書苑菁華一七に載せられている。全唐詩二六一にも見える。任華は李白、杜甫と同時代の詩人で李白と杜甫に寄せた詩がある。懷素上人草書歌は、当時の数多くの詩人の同題で作った中でもとくに長篇の佳作である。待訪録には「尚方有三幅。乃其後幅。適完。嘗請出第觀。復歸尚方」とある。

草書祝融高坐對寒峰二行 書史12

懷素の草書した「祝融高坐對寒峰」。緑絹帖である。二行ある。この字はもともと佳い。石紫微（石揚休）がかって石に刻したことがある。六行あったが、今は前の四行は見られない。石夷庚（石揚休の孫）にたずねると、王欽臣（王洙の子）の家の、雑色の纈絹の背面にある以詩代懷帖と同軸であるという。今、王の子のとき、宗室が買い求めた。これこそ懷素の天下第一の好書である。

注 今、戲鴻堂帖に刻されたものがある。全七行草書体でかかれ、末一句が「祝融高坐寒峰」である。董其昌の跋には、祝融高坐兩行。素書。入神。其前尚有四行未見。此帖共六行。然亦未全也」とあり、前四行の状況がこの跋では明らかでなく、刻字とも合わない。

以詩代懷帖 書史12 26

呂昌道大夫の家に、懷素の兩帖がある。若いころに書いたものである。今、錢總の家のものとなっている。また、侍郎の王欽臣が、懷素の「以詩代懷寄浩公」をもっている。碧緑地に雑色の纈の上に草書したもので、老筆は特に高妙である。

草書楮紙三幅 書史12

懷素の草書、楮紙にかいたもの三幅、故の宰相、洛陽の張公（齊賢）の孫、直清の家に在る。

絹書一軸 書史13

薛紹彭が懷素の絹に書いた一軸と、肅宗の綾紙にかいた行書の千文とをもっている。錢景謏の処で購ったものである。また、王仲至（王欽臣）の処で、楮遂良の書いた麻紙一幅、楊凝式の黄麻紙に書いた小字一幅を、私はみな見ている。歐陽詢の孝經一卷は、薛（薛紹彭であろう）が臨書して錢公（錢總であろう）に寄せたもの。これはまだ真迹を見ていない。

注 錢景謏、錢塘の人。惟演の孫。はじめ王安石に仕えたが、のち地方官に貶せられた。宋史三一七。

与皇少卿簡 書史25

晁端彦が、懷素の皇少卿に与うるの簡、大紙の一軸を収蔵している。筆勢は簡古で、老年の筆である。この書は潤筆を索めるのを障ぎる書簡である。

注 晁端彦、字は美叔。清豊の人。章惇と同年の進士で、同じ館職に在った。詩文と書法を善くしたという。障索二字は解し難いが、求めるのを障ぎる意にとった。皇少卿は未詳。

蕭常侍日下三帖 待訪録13

右朝議大夫晁端彦の処に在る。

注 晁端彦は前注に見える。

高 閑

草書千文

唐僧高閑の草書千文。楮紙の上に書かれた真迹。李熙のところに在る。

注 高閑は韓愈の送高閑上人序によって、張旭を承けた狂草の名手として知られる。今、上海博物館真蹟本高閑千字文があり、紹介されている。明の林佑の跋を付している。この本は元の收藏家喬質成の旧藏本である。

令狐楚の詩 書史17 待訪録12 13

唐の高閑の書、令狐楚の詩。尚書李常の家にある。

注 李常（一〇二七—一〇九〇）字は公拱、建昌の人。皇祐の進士。王安石と親密で、哲宗のとき御史中丞となった。読書を愛し、蘇東坡に李氏山房藏書記がある。宋史三四四。尚書の官には就いていない。待訪録に、右真蹟は戸部尚書康季常の家にある。某は石本の湖州に在るのを見た、という。李常を康季常に作っている。康季常は伝記未詳。

聶光

聶光書 書史 21 前出

聶光は姓吳氏、永嘉の人。陸希声に撓鐙の書法を授かり、張旭の狂草を承けて妙境に至った。釈貫休、吳融、陸希声、羅隱等がかれの草書を称えた詩がある（書苑菁華）。

楊凝式

三帖 書史 19 待訪録 9

楊凝式は、字は景度。書は天真爛漫で、縦逸なことは顔魯公の争坐位帖に似ている。秘閣校理蘇澥の家に三帖あり、第一は白麻紙で、「景度上大仙」とある。第二、第三は小字で、薛紹彭家所蔵の正書とよく似ている。私は三度交換して手に入れた。のち第一帖を交換して王詵に与え、第二帖を交換して劉涇に与えた。私の家には今、楮紙の上にかいた詩がある。それは「春來氷未泮。冬至雪初晴。初報方袍客。豐年瑞已成」とある。王詵は画をもって趙叔盭と交換した。その書は紛披たる老筆である。王安石は若いときにこれを学んだことがあるのを、誰も知らない。元豐六年（一〇八三）、私ははじめて荆公（王安石）と鍾山において識りあった。そのときこの帖のことが話題になった。公はたいそう賞歎して、だれもこのことを知っているものはないと言った。そのうち、王が私にさしだす書簡はみなこのような字である。

注 趙叔盭、字は伯充、廷美の四世の孫。画馬を善くしたので知られる。蘇東坡と詩の酬唱をしたことがある。画繼、図繪宝鑑等に見える。米芾にこの人に宛てた書簡がある。待訪録に楊凝式書三帖とあるのはこれをさすであろう。珊瑚網ではこの下に「在張汝欽処」五字がある。張汝欽は張齊賢の孫の張直清のこと、あざな汝欽という。

楊凝式数帖 書史 20

張清直の家に楊凝式の数帖がある。真行体で、たいそう好い。

小字黄麻紙一幅 書史 13 前出